

大同心南稜

平成 30 年 2 月 26 日

メンバー：松野（L）、草田（記）

今回の山行は、赤岳鉱泉を拠点に 1 泊 2 日で松野さん希望の大同心南稜と私が熱望した中山尾根を攻める予定だったが、自分の仕事の都合で直前になって日帰り山行となってしまった。しかし、非常に楽しく有意義な山行だった。

赤岳山荘に着く頃には、もう明るくなり始めていた。まだ春分の日は一ヶ月近く先だが、それでも少しずつ日が長くなっているのは実感できる。

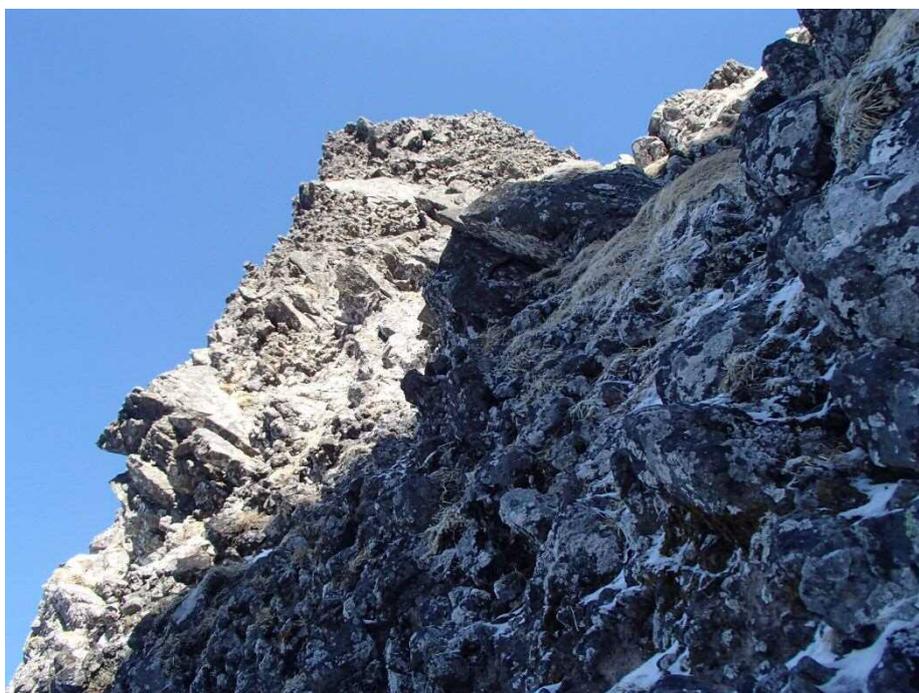
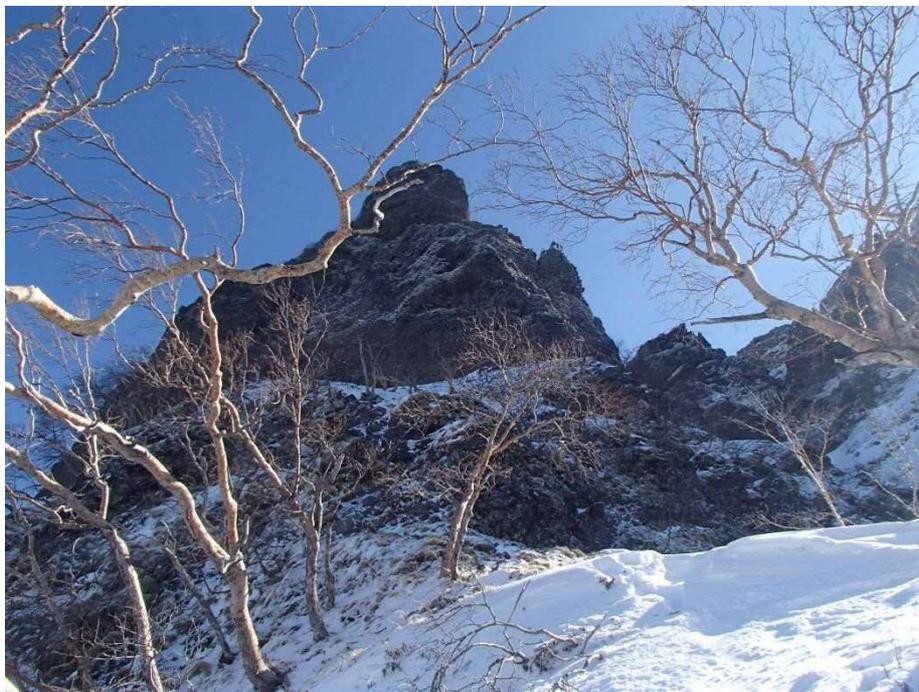
松野さんは「今日はそれほど寒くないよ」と言いながら、身支度をする。私にはとてもそんな風に思えなかったが、それでも歩いていけば寒くはないだろう。ビレイの最中だけ耐えればいい。幸い天気は良さそうで、日が当たれば暖かくなりそうな気配のする朝であった。

北沢を歩き始める。所々凍っていたが、わざわざアイゼンを履くほどでもない。朝の冷たい空気を切り裂きながら、淡々と進んでいく。林道を終えると少しずつ景色が開けてくる。朝日に照らされた八ヶ岳の山々。やっぱりいつ来ても雪山は美しい。

暫くすると大同心が見えてきた。デカイ。まだまだ距離はあるのに威圧感が凄い。その圧倒的な存在感が、私を奮い立たせた。興奮が抑えられない。4 年前に初めてこの道を通った時、あれに登ろうなんて考えもしなかった。登れるものだとは考えもしなかった。しかし今、私はあの発射台へ登るために向かっている。高揚感が抑えられない。見惚れるように歩いていると、鉱泉へ着いた。



鉾泉で小休止を挟んだ後、少し迷いながら大同心南稜へつながる尾根に取付く。松野さんの調子は相変わらず悪そうだ。息遣いが荒い。それでも一歩一歩チラチラと見える大同心へと向かっていく。近くて遠い。鉾泉では目の前だった気がしたのに、歩くと長い。しかも急登。そんな気が長くなる樹林帯をようやく抜けると、眼前には大同心がそそり立っていた。そして一目見た瞬間、私はそのスケールに怯んだ。



雪稜で小休止をした後、いよいよ大同心に取付く。日和った自分の心を奮い立たせる。初めての冬季アルパイン。勿論私はセカンドだ。尾根を少し右へと回り込み、一ピッチ目を松野さんが上り始める。早い。さっきまで調子が悪いと連呼していたのが嘘のようだ。その小さな背中が大きく見えた。見惚れているうちに「ビレイ解除」の叫び声が聞こえた。いよいよだ。気合が入る。「行きます」と声を張り上げて、私は挑んだ。



登り始めると想像以上に難しい。アイゼンやゴム手袋が思った以上に身体を奪う。そして高度感が身体を凍ませる。なんで松野さんはあんな簡単に登れるのだろう。恐怖感と焦りが募る。それでも松野さんの声に助けられながら、記念すべき1ピッチ目を終えた。



それから先は正直よく覚えていない。本来ならどこがポイントとか、どういうルートをとどったとか、終了点にリングボルトがあるだとかを書くべきなのだろうが、そんなことを考えている余裕はなかった。ただ必死だった。ただ無我夢中だった。そうして一応ノーテンで3ピッチを終えた。4ピッチ目は基部までトラバースするだけの易しい場所だった。自分がトップで最終ピッチを終えた。その瞬間、安堵感に私は包まれた。



基部で小休止をした。松野さんはもうすっかり調子を取り戻していた。照らされる日の光が妙に心地よい。これが生を実感することなのか。厚い雪化粧に覆われた赤岳と阿弥陀岳を眺めながら、行動食を頬張る。帰りは少し南に残置スリングがあり、そこから1本だけ懸垂下降で下りた。あっという間に南稜の取付きに戻ってくると、なぜだか少し寂しい気がした。



岩を登っている最中は、その恐怖感からもうアルパインはいいかなと思ったりもしたが、下りてくると不思議とまた登りたくなった。達成感なのか、生を感じられるからなのか、それとも開放感なのか、理由はさっぱり分からないが、きっとまた来るだろう。その時は自分がトップで余裕をもって登れるようになっていたい。

《コースタイム》

6 : 10 美濃戸ー7 : 40 赤岳鉱泉ー9 : 50 大同心基部ー12 : 40 ドーム基部（4ピッチ目終了点）ー13 : 40 大同心基部ー14 : 30 赤岳鉱泉ー15 : 50 美濃戸